

IV-77

自由連想法による「住みよさ」に関する意識構造の特性の解析

国立公害研 正会員 ○大井紘 京都産業大学 正会員 勝矢淳雄
筑波大学 宮本定明 筑波大学 阿部治 国立公害研 須賀伸介
筑波大学 中山和彦

§ 1 緒 言

本研究では、生活の場あるいは住む場を人々がいかなる拡がりて捉えているか、その拡がりの中で、各項目がどのような結合関係を持って認知されているかを明らかにしようとする。即ち、生活の場についての人々の認知空間の拡がりて構造を明らかにしようとするものである。また、この研究は居住環境が、生活の場についての人々の連想にどのように反映するかを解明しようとする試みでもある。

§ 2 認識空間解明のための連想テスト法

前報^{1,2)}と同じく、「住みよさ」、「住みやすさ」という刺激語を調査対象者に示し、これから連想することを回答してもらう自由連想法によるアンケート調査を行った。全回答者によって総計s回以上連想された語 w_i の集合 $W = \{w_1, \dots, w_n\}$ と、Wの語を1個以上連想した回答者 r_i の集合 $R = \{r_1, \dots, r_m\}$ について、それぞれクラスター分析を行う。計算は、文献引用関係の表現のために、Miyamoto & Nakayama³⁾ が提案した方法により、計量書誌学パッケージ PAB⁴⁾ を用いた。即ち、回答者uが語 w_i を連想した回数を a_i 、回答者vが語 w_i を連想した回数を b_i で表わす。このときふたりの回答者u、vの間の類似度を次の式で与えて、³⁾回答者のクラスター分析を行う。

$$r_{uv} = \sum_{k=1}^n \min(a_k, b_k) / \sum_{k=1}^n \max(a_k, b_k)$$

また、二つの連想語の間の類似度も同様に定める。^{1,2)}

§ 3 調査結果の解析

調査対象者群は、①茨城県新治郡新治村(新治)②東京都北区豊島5丁目団地(豊島)である。①は県南の農村であって、市街地化した部分を除く。②は13階建て約5,000世帯12棟最大3DKの公団住宅の、10階以上である。標本は系統的抽出法に依って各500戸を選んだ。調査は郵送法に依り、有効回収数は新治230、豊島165である。連想頻度上位の語をTable 1 に示す。便利、交通の順位がほぼ同じなのに對し、近い、広いの順位が逆転している（新治では、広いは14位、頻度43）

Table 1 連想語の頻度表

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
新治	便利 93	環境 76	交通 74	近い 60	家 60	緑 58	空気 58	生活 55	公害 53	自然 52
豊島	便利 108	緑 91	広い 84	交通 70	環境 53	静か 49	近い 47	空気 40	家 34	買い物 33

ことは、住居の内外ともに広い新治と、高層団地の対照と関連づけて考えられる。

連想語のクラスターを、Table 2 に示す(s=10)。新治の左か

ら第2のクラスターはそれぞれ、生活に身近な利便性と快適性にかかわるもので、第3のクラスターは、連想の内容が家の中からその周辺にひろがっている。豊島では、

Table 2 自由連想語のクラスター <縦線はクラスターの境界> (上:新治、下:豊島)

関人公	き空	静道便交環自生	学近買	広陽	近つと	下完	整公	騒	住	ご	→
係間害	れ水	道便交環自生	校い物	い家庭	所あ	水道	備備	音	川山	宅み	
	い気	か路利通境然活		たり	い	道	備備	音			
隣商家	ス	文施機	ゆ健自	楽言社家子	安	安	明暖	太	豊	恵	恵
人店族	車	化設関	り康分	しい業会庭供	木	人心	るか	暖	平	蠅	地
	パ	！			い	き	都	かい	陽	臭	域
								い	和	か	た

関人騒	生住	自	公施物	安近	つと	家子	公商	病学	近場	き	空便	静広	買環	間取	通	明暖	陽	安	空	太
係間音	家	活宅	然	共設	価い	所あり	店	街院	校い	所	い気	利通	かい物	境	勤	い	た	木	川水	公
							屋	園										間	声人	害

